

# 八代宮地紙漉きの里を次世代につなぐ研究会

熊本県八代市

400年の伝統を有する宮地和紙の保存・継承



## 活動に至った理由や背景

熊本県で最も古い歴史を持ち、加藤・細川藩の御用和紙として県下随一の技術を誇った宮地和紙。昭和50年代から宮田寛さん1人(熊本県下でも宮田さん1人)が生業として、専業ではなく兼業で紙漉きを続けている状況でした。また宮地地区には、紙漉きのために水無川から引かれた幾筋もの水路が、美しい景観を呈していました。しかし、この水路を一部暗渠にする計画があり、宮地和紙とこの水路景観を次世代に残すため、地元住民、紙漉き関係者、高専教員、学生、専門家などに声をかけて2015年4月に会を設立しました。

## 団体設立経緯

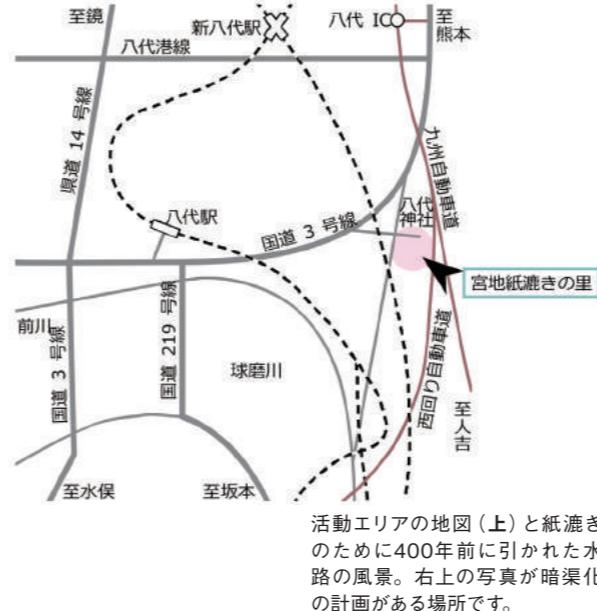
今から17年前の2002年頃に熊本高等専門学校専攻科(建築デザイン系)の課題の中で学生、森山学先生、磯田で宮地和紙の紙漉き職人宮田さんを訪ねる機会がありました。「八代宮地に紙漉きの宮田さんという方がおられる。八代固有の材料としては非宮地和紙を(課題の中で)使いたい」という学生の希望でした。和紙を数枚購入しました。当時から宮田さんを存じ上げていました。

それから10数年後、やはり専攻科の学生が宮地地区のレポートを提出。それはカニの籠が仕掛けられていたり、脇に白菜が干してあったりする“暮ら

しの中の美しい水路”的の報告書でした。宮田さんの職屋のすぐ近くの水路です。学生を連れ、宮田さんを再度訪ねました。そして、そこで初めて宮地和紙と水路の関係を理解しました。

水路は水田のための水路ではなく、まず、紙漉きのために引かれた水路だったこと、宮田さんはこの水路を使って紙漉きをされていることを初めて理解しました。

聞き取りを進めると、意外な答えが返ってきました。宮田さんが紙漉きを辞めるのを待って、目の前の水路を暗渠にするというのです。軽自動車は現在でも通ますが、普通車が通れるように道幅を広げるためです。市議員の提案らしく、消防車や救急車の話



も出ます。水路の上流部分は20年前頃に既に暗渠になっています。何とか暗渠化を阻止できないか? しかしこれは地元自治会の要望でもあり、デリケートな問題です。

そこで、地元自治会長にお願いして回覧板を回していただき、「美しい水路景観と宮地和紙を残せないか?」と地元住民の方々との会合を開催しました。高専側からは設計課題として取り組んでいる提案を提示して、意見をお聞きしました。このような会合を2年間続けました。住民との会合には専門家として、熊本県景観アドバイザーの澤治彦氏に参加を依頼しました。

翌年の2015年に「八代宮地紙漉きの里を次世代につなぐ研究会」を設立しました。専門家として澤さんに加えて、和紙デザイン開発をお願いする崇城大学芸術学部デザイン学科の原田和典教授、地域計画の高木富士川計画事務所の高木淳二氏、土木系まちづくりの熊本大学工学部の田中尚人准教授と学生たち、フットパス研究所の井澤るりこ氏、宮地和紙の歴史についての監修として八代市立博物館未来の森ミュージアムの専門官早瀬輝美氏、山崎摂氏などに関わっていただきました。

引き続き同じ会場で「宮地和紙に暮らす店」を開店しました。宮地和紙の展示・販売です。宮田さんが漉いた障



子紙、ちり紙、矢壁さんの水玉紙、打ち雲紙、宮地和紙を使った崇城大学デザイン学科の学生の作品などです。

7月は子供たちを対象とした「宮地和紙と遊ぼう! 宮田のおっちゃんにこれまでありがとう! 暑中見舞いを出そう!」を開催しました。これは宮嶋利治学術財団との共催です。講師は八代市で絵手紙教室を主宰する岸辺孝子先生。参加者は約40名。宮地和紙に桜の花びらや季節の野菜、カブトムシなどを書いて着色し、はがきに貼りつけて作りました。

同じ7月に、宮地和紙と同じ400年の伝統がある山鹿市来民うちわとのコラボ「涼やかな風を運ぶ宮路和紙うちわ作り体験」を開催。同地の栗川商



## 活動概要と活動対象範囲

- ①宮地和紙を八代市はもとより広く知っていただくこと
- ②宮地和紙を保存・継承する手立て

子どもたちを対象とした絵手紙ワークショップ



半年がかりで準備を進めていた「白和幣プロジェクト」。八代妙見祭の行列で、初めて本物の宮地和紙で製作した白和幣を用いました。神幸行列絵巻（左、八代神社蔵）の研究過程で由来が明らかになったものです。

店のうちわ職人の方が来訪し、宮地和紙を使って“マイうちわ”を作りました。参加者約40人。

9月は、熊本県伝統工芸館で毎年開催されている「八代の工芸展」（八代工芸協会主催）にて宮地和紙コーナーを設けていただき、出展しました。宮田さんが1日展示会に来られました。

11月には、5月から半年がかりで準備を進めていた新たな取り組み「白和幣プロジェクト」が実現しました。同じ11月に、先に紹介した卯川先生と岩上孝二先生の講演会、「妙見祭と宮地和紙」を開催しました。卯川先生には宮地和紙と妙見祭との関係、岩上先生には宮地和紙の新たな可能性、地域ブランディングのお話を聞いていただきました。コーディネーターは崇城大学で宮地和紙のデザイン開発を指導する原田先生です。参加者は約20名でした。

熊本県労働団体の1泊の旅行で紙漉き体験ができないかとの問い合わせがあり、紙漉き体験はできないが和紙を使った工作なら可能ということで、11月末に出前工作を実施しました。内容は、崇城大学学生がデザインした「ミニランプづくり」で、参加者は子どもたちも含めて約30人でした。

その白和幣を、今回初めて矢壁さんが漉かれた本物の宮地和紙で作っていただきましたことになりました。妙見祭当日は、白和幣の行列中に宮地和紙の紹介がアナウンスされました。

1月のひと月間、八代奈久温泉の



妙見祭当日、「宮地和紙に暮らす店」を出店



金波楼での「ミニ和綴じ本づくり」ワークショップ

また、妙見祭前日の御夜と当日は毎年「宮地和紙に暮らす店」を開店します。本年度も開店しました。御夜は八代アーケード街にて、妙見祭当日は神幸行列が中休みをする宮地小学校グラウンドです。妙見祭当日は崇城大学学生と教員が宮田さんや矢壁さんの和紙に加えて、彼ら自身がデザインした和紙作品を販売しました。

同じ11月に、先に紹介した卯川先生と岩上孝二先生の講演会、「妙見祭と宮地和紙」を開催しました。卯川先生には宮地和紙と妙見祭との関係、岩上先生には宮地和紙の新たな可能性、地域ブランディングのお話を聞いていただきました。コーディネーターは崇城大学で宮地和紙のデザイン開発を指導する原田先生です。参加者は約20名でした。

3月には八代観光ガイド協会の方々が研修として紙漉き体験をされました。参加者は15人でした。

協力団体：崇城大学芸術学部デザイン学科、公益財団法人宮嶋利治学術財団、八代絵だよりの会、珈琲店ミック、日奈久温泉金波楼、八代市立博物館未来の森ミュージアム、熊本高等専門学校八代キャンパス、八女伝統工芸館、和水町みかわ手漉き和紙の館



1月と2月に開催した「紙と水辺の暮らしを歩く」。初めての試みとして、まちあるきの後に紙漉き体験を実施しました。

伝統ある宮地和紙をこれからも残していくたい。  
が、現在、社会でまだ知らない日本人がいるので、このままでは消滅していく一方ではないのか、と懸念をおこす。そこでたらデザインの力を借りることにした。  
宮地和紙は一枚一枚手作りで違う色や形があるのに、手のひらで握りたたむとそれがまたまた違うようう。これがそのまま伝わっていけばいいな。  
また、これまでのものと比べて、自分で自分で手漉き紙を自分で作る楽しさを伝える。  
わたしたちがそれを「手やじっくり」と名付けた。

宮地和紙をより多くの人の手に。  
学生が復讐する。  
新しい宮地和紙のあり方。  
The new way to use Miyagi Washi paper product.

出展された宮地和紙デザイン1号館  
2.セラプロトクトアートの世界  
インテリードesignやソノツイについて学ぶ。  
内は宮地和紙で八代市宮地和紙を調査し、宮地和紙の作り方や材料について詳しく説明。  
それを改修された宮地和紙を販売。

崇徳大学が、宮地和紙を使った商品開発に協力

## 今後の予定

子どもたちを対象とした宮嶋利治財団共同の宮地和紙イベントは、若い世代に宮地和紙を知ってもらうために大事な取り組みだと思います。また今回初めて取り組んだ、山鹿市来民の栗川商店とのコラボ「うちわプロジェクト」も好評でしたので、今年も続けたいと思います。

「紙と水辺の暮らしを歩く」は、今年は紙漉き体験を組み込みました。紙漉き体験は準備などが大変ですが、参加者は喜ばれます。またこの参加者には紙を用いた、例えば日本画、ちぎり絵などに取り組んでいる方々の参加があり、和紙をベースに輪が広がります。今回は和水町の同じ紙漉き保存会の方の参加もありました。これからも続けたいと思います。

伝統工芸を維持していく事の難しさをあらためて痛感しています。

## 課題と解決方策

昨年2018年3月に、宮田さんが高齢のため70年近く続けていた紙漉きを辞められました。現在は、先祖が御用紙漉きである矢壁さんが市立宮地小学校、第八中学校における和紙の卒業証書づくりを引き継いでいます。

宮地和紙を広めていくためには、和紙の良さだけを訴えてもダメで、今の暮らしに求められるものとしてアピールすることが重要です。これは、和紙が使われなくなった50年以上前から言い続けられていることです。

和紙を使った新たなデザイン開発として、崇城大学芸術学部デザイン学科の学生とのコラボレーションを会設立当初から進めています。“ガメカード”や“ポチ袋”など「宮地和紙に暮らす店」で売れる商品が開発されました。さらにそれを「数多く製作し宣伝し販売する組み」がまだできていません。これが第1の課題です。

宮地地域の住民としては宮田さんや矢壁さんをはじめ主婦の方々の参加がありました。しかし、高専教員や崇城大学（熊本市）の教員との会合の日程調整が困難でした。どうしても夜の会合になりますが、主婦の方の夜の参加は現在でもほぼ不可能です。土曜の午後一が可能ですが、その日程調整はとても困難です。イベント時には参加されます。もっと地域の方々への参加を呼び掛ける必要があります。メー

### ●八代宮地紙漉きの里を次世代につなぐ研究会

設立年月	2015年4月
メンバー数	12人
代表者名	磯田 節子（いそだ・せつこ）
住 所	〒860-0088 熊本県熊本市北区津浦町13-93-401
電話/ファクス	090-3603-0688/096-351-2490
Eメール	Setsu.isoda@gmail.com
FBページ	<a href="https://www.facebook.com/miyajiwashi/">https://www.facebook.com/miyajiwashi/</a>

【団体のミッション】私たちは、熊本県の中で最も古い歴史と高い技術を誇った「宮地和紙」の保存・継承と、和紙づくりを支えた水路景観の保全を目的としています。紙漉きの里を歩く、新たなデザイン開発、手漉き和紙づくり体験などの活動を実践しています。